

氏 名	林 義 雄 はやし よし お
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 576 号
学位授与の日付	昭 和 50 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	京都市近郊特産蔬菜作の変遷過程

論文調査委員 (主 査) 教授 三橋時雄 教授 上村恵一 教授 頼 平

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は京都市近郊特産蔬菜作の変遷過程を、立地変遷の実態、技術の変遷、流通機構の変遷を通して明らかにし、特産蔬菜作の変遷と近郊農業展開との関係を究明したものである。

第一章は京都市近郊農業の自然的条件と社会的・歴史的条件を述べ、それに基づいて地域区分を試みている。

第二章はまず京都市近郊特産蔬菜の種類と性質とを明らかにし、その立地変遷の実態を示し、これら特産蔬菜の立地変遷の要因を究明している。次いでこれらの要因による立地変遷のメカニズムを明らかにし、これらの要因によって京都市近郊特産蔬菜を分類している。

第三章は蔬菜作技術の歴史的発展の中において、京都市近郊蔬菜作の技術がどのように変遷して来たかを述べている。まず土地利用技術の変遷を明らかにし、次いで特産蔬菜作技術の変遷を生産費の変遷と労働量の変遷という面から捉え、さらに農業生産技術を有機的生産技術と無機的生産技術とに分けて、それら個々の技術の変遷の実態を明らかにし、技術変遷の理由を解明している。

第四章は京都市近郊蔬菜の流通機構の変遷を、中央卸売市場開設前と開設後とに分けて述べている。

第五章は京都市近郊特産蔬菜作と近郊農業との関係を論じている。まず農家の所得経済の中における特産蔬菜作の目的と地位が古来いかに変遷してきたか、またその理由は何であるかを述べ、次いで特産蔬菜作の興亡を作付面積の変化と立地の変化とによって8類型に区分し、その類型ごとに特産蔬菜が京都市近郊農業に与えた影響を論じている。

一方、京都市近郊農業の展開を農家率、専業農家率、一戸当り平均耕地面積、生産年齢人口農業従事者率等の要因によって幼年期、壮年期、老年期の7類型に区分し、最後にこの近郊農業の展開類型と上記特産蔬菜作展開の8類型との関係を論じ、壮年期型の所は特産蔬菜作との関係が深く、老年期型の所は特産蔬菜作との関係が薄く、幼年期型の所は特産蔬菜作が発展しそうな所であるとし、有力な特産蔬菜を持つことが、近郊農業の発展に強い力となるのであって、これを更に敷衍すれば、土地面積に恵まれない地域

の農業振興には、蔬菜に限らず特産物が有力な要件であることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

平安京以来の都であった京都の周辺には、古来「京の蔬菜」として幾多の特産蔬菜が栽培され、日本農史上、有名であるが、その中には既に滅び去ったり、滅びかけているものもある。

著者はこの滅び行く京の蔬菜とその産地を史上に留める目的で、長年にわたってそれら特産蔬菜の産地を廻り、その実態を調査するとともに、古い文献・資料の収集に努め、それらを基礎にして、京都近郊特産蔬菜作の変遷過程を立地の変遷、技術の変遷、流通の変遷の観点から究明した。このように著者が多年の努力の積み重ねによって、日本農史にとって重要な「京の蔬菜」の歴史を集大成したことは、農史学の上から高く評価されてよい。

いま本論文が究明した独創的な点についていえば、(1)京都近郊農業を一般的な立地条件のみならず、とくに京都の特殊性よりみて旧街道および神社の氏子区域をも指標に入れて地域区分をおこなった。

(2)立地変遷の要因を機能、性格、需給、種別の四つの観点から分類整理し、これらの要因による立地変遷のメカニズムを明らかにした。

(3)蔬菜作技術の変遷において、土地利用の高度化による蔬菜作の集約経営が進められた過程と要因を明らかにし、蔬菜の種類増加、とくに要新鮮性蔬菜の比重増加を実証するとともに、諸種の技術の展開を実証的に解明した。

(4)中央卸売市場開設後における蔬菜の流通については、中央卸売市場出荷、野市出荷、直売および産地販売に分けてその実態を解明し、近郊蔬菜としての特色を浮彫にした。

(5)これら特産蔬菜作の変遷を作付面積および立地の変化によって8類型に区分し、その類型ごとの蔬菜が近郊農業に与えた影響を論ずる一方、京都近郊農業の展開を数種の要因によって7類型に区分し、この両類型間の関係を論じた。

以上、要するに本論文は京都の近郊に特有な蔬菜の変遷とその要因を生産技術、経営、流通機構など各方面から実証的に、しかも総合的に克明な究明をおこなったもので、とくに特産蔬菜の立地変遷についての論述には独創的な新知見がみられる。

京都近郊特産蔬菜の歴史に関する詳細にして総合的な、他に類を見ない独創的な研究として、農業経営史学に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。